

「リウマチ手記」柴田 けい子 63歳

2013年10月1日

[関節リウマチの経過]

◎平成24年12月頃 右足の踵と足首の間が赤くなる
この時、痛みなどはなかった。しかし、赤の色が気味悪く、胸騒ぎを覚える。

◎平成25年1月末 県内病院の皮膚科受診
右足の踵と足首の間が赤く腫れ、攣る感覚あり。
医師は異常ないと診断する。

◎同年2月上旬 同病院皮膚科を再び受診
赤く腫れたところに痛みを感じたため、受診。
原因不明と診断。抗生剤2週間分処方され、服用するが症状改善なし。
その後、同病院の整形外科にまわされる。足に激痛を覚えるが、独歩で診察室へ行く。受診後、駐車場まで歩くことができず、看護師に車椅子で連れて行ってもらふ。整形外科では、塗り薬が処方され、様子を見ることになる。

◎同年2月末 同病院整形外科受診
前回処方された抗生剤の副作用強く、また、症状改善なく医師に相談。
「じゃあ、麻薬でも使っちゃう?」という医師の言葉に愕然とする。さらに、「もう診ることないんだよね」と言われる。
*ここで、麻薬の使用などはしていません。

◎同年3月上旬 県外病院の皮膚科受診
病院を変え、そこで血液検査を受ける。この検査で、関節リウマチであることが分かったらしく、整形外科にまわされる。
整形外科にて、関節リウマチと医師から告げられる。同病院では、リウマチ科がないため、都内の大学病院を紹介される。

◎同年3月末 都内大学病院のリウマチ科受診
血液検査、胸部レントゲン
肺に陰影あり。肺がんの疑い、または、関節リウマチが原因の結節の疑い。
リウマトレックスカプセル2mg、フォリアミン錠、ロキソニン錠60mg、ムコスタ錠100mgが処方される。
なぜか薬を服用する気になれず、服用しないまま過ごす。

◎同年4月中旬 同大学病院受診

処方された薬を飲む気になれないこと、漢方薬で治療する方法はないかどうか相談する。しかし、漢方薬の処方はないと医師に言われる。

関節リウマチは、回復の見込みないと医師から伝えられる。

付き添いで来ていた娘に、ネットで探すよう頼む。

娘、病院のロビーで携帯電話を使い検索。松本医院のことを知る。

◎同年4月下旬 松本医院受診

初めて、松本医院を受診する。関節リウマチと肺がんの疑いがあることを相談する。「治らない病気はない!」という先生のお言葉に救われる。

血液検査データ

・ γ G:21.7、TTT:4.9、ZTT:12.1、水痘帯状ヘルペス VZV 1gG判定:+、EIA価:23.5、CPR:1.20、RF定量:50、マトリックスメタロプロテイナーゼ3:86.2、SCC:0.7、CEA:1.2

*この血液検査で、肺がんではないことがわかる。

受診後、ホテルへの帰り道、新大阪駅近くで全身の痛みが増強。歩行困難。

ホテルの送迎バスを待つバス停で、あまりの痛さに泣いてしまう。

翌日も松本医院を受診予定であったが、あまりの痛さのため動くことができず、受診できず。

◎同年5月

足が痛い。トイレに行くことも困難。

漢方薬とベルクスロン錠服用。

手指はシワがなくなる程腫れ上がり、痛みあり。スプーンさえ持てない。

食欲低下し、60kg台の体重が12kg減る。

◎同年6月

症状変わらず。食事するのも疲れる。

雨天の前日は痛みが増す。漢方風呂に入ると症状軽減する。

◎同年6月末 松本医院受診

2度目の受診。

東京一新大阪の駅構内は車椅子を利用。

少し人とぶつかっただけでも痛いため、車椅子を使用。車椅子では目線が低くなるため人ごみで恐怖感覚える。

血液検査データ

・ γ G:21.8、ZTT:12.1、CPR:1.39、RF定量:76、マトリックスメタロプロテイナーゼ3:168.4

◎同年7～8月

7月頃から痛みが軽減する日もあるようになる。トイレは1人で行ける。
入浴は、週2回ヘルパーさんにお世話になる。または、娘。
料理はまだできないため、娘に頼む。

◎同年9月

症状が少し落ち着く。介護用の調理器具購入し、台所に立てるようになるのを嬉しく思う。
車椅子で買い物に行っていたが、自家用車を改造し、20分くらいなら運転できるようになる。100m位歩行可能になる。食欲回復する。

母の様子を見ていると、調子の良い日とそうでない日と波があるようです。しかし、関節リウマチと診断された今年3月に比べ、症状が良くなっていくように感じます。

母が初めて診断を受けた日、かなり落ち込んでいました。学校から帰ってきた私を泣きながら出迎えたのを覚えています。

泣いている母を見て、私自身も困惑しました。私は看護学校に通っているため、関節リウマチについて簡単にですが学んだことがあります。そのため、母は不治の病にかかってしまったのだと、ショックを受けました。また、関節リウマチは痛みを伴い、長期間その病気と付き合わなければならないということに心配になりました。

大学病院を受診時処方された薬を飲まなかった時、正直私は怒りを覚えました。母には薬を飲んで、症状を遅らせてほしいと思っていたからです。その方が母のためだと思っていました。しかし、母の「この薬は飲みたくない」

という直感で、大学病院の先生に漢方薬について相談しました。結果は、漢方薬での治療は行っていないということで、病院のロビーで、この先どうしたら良いのかわからない状態で、携帯電話で「関節リウマチ漢方」のようなワードで検索しました。これが、松本医院との出会いです。私も娘として、母の希望する治療法で治療を受けるのが最善だと考えていたので、この出会いは希望の光のようでした。そして、松本先生の「治らない病気はない」というお言葉が、母と私の大きな力になっています。そして、そう信じています。当初は、塞ぎ込んでいた母ですが、最近では、少しずつ料理ができたり、掃除ができたりするようで、それを嬉しく思っている様子です。もちろん、痛みが強い日は、横になっている時間が多く、辛そうな表情をしています。

それでも、焦らず、この病気と向き合っていこうとしているように感じます。千葉から大阪までの旅費は、私が付き添うこともあり、年金暮らしの我が家では少々高額です。そのため、頻回に受診することはできませんが、今後も松本先生にお世話になりたいと思っています。

最後に、この手記が、関節リウマチで悩まれている患者様にとって、少しでも励みになることを願っております。